

飯舘村までいな農村計画 2016 :

除染後農地における ICT を用いた花園計画

農学国際特論 I



目次

1. まえがき	3
2. 活動記録および今後の予定	6
3. 前提・背景	7
3-1 原発事故	7
3-2 避難	7
3-3 大久保金一さんについて	9
3-4 避難指示の解除について	12
4. 活動経緯	14
4-1 先輩方から聞いた大久保さんのお話	14
4-2 先輩の活動	15
4-3 私たちが聞いた大久保さんのお話	15
5. 活動構想	17
5-1 大久保さんの意見	17
5-2 先輩方の思い	17
5-3 私たちの結論	18
6. 実施したこと・今後の展望	19
6-1 Facebook ページ	20
1) フォトコンテスト	22
6-2 ホームページ(HP)	23
1) ツーショット写真	26
2) 定点カメラ	28

6-3	パンフレット・図鑑	29
	1) パンフレット	29
	2) 図鑑	30
6-4	コネクト	31
7.	感想	34
8.	連絡先	38
9.	謝辞	39

1. まえがき

2011年3月11日。当時の状況をすぐに思い出すことはできただろうか。そしてその日から、どんな変化が起き、どれだけの人が心を痛めたか、思いを馳せたことはあるだろうか。もしかすると、もう記憶が薄れてしまっているという方もいるかもしれない。人間の脳は、これまでの事象すべてを記憶することはできず、自身の機能保護のために時々刻々とあったことを忘れていってしまう。「生きるためにそれは仕方のないことだ」と考える人もいるかもしれない。ただ、なかったことのようにとらえてしまうのは違う気がする。忘れるという権利がある代わりに、我々には思い出す義務があるように思う。

私たちが初めて飯舘村を訪れたとき、確かな衝撃を受けた。雨戸の閉められた家々、周囲の景観にそぐわないうず高く積まれた黒い袋、至るところで自己主張する黄色い旗…。そんな地で私たちが出会えた方々はみな、強い熱意を持って活動していた。その強い意志の背景には、数えきれないくらいの感情がまぜこぜになっているように感じた。理不尽さへの怒り、後悔、悲しみ・不安。それだけではなく、人と人とのつながりから生まれる楽しさ、幸せ。新しい出会いへの期待、未来への展望。「知りたい」、「見てみたい」という小さなきっかけから始まった私たちの心は、その逞しい方々によって大いに動かされ、少しでも自分たちにできることはないかと模索するようになった。

飯舘村で活動されているたくさんの方々のお話を聞き、私達の活動方針について議論を重ねた結果、私たちは、先輩方が行ってきた活動をさらに多くの人に知ってもらう広報活動に重点を置くことを決めた。これは、先輩方の活動を引き継がなければならないと考える一方で、取り組みをもっと多くの方に知ってほしいという思いがあったからである。本稿には、これまでの活動経緯と、それらを踏まえた私たちの思考プロセス、それをもとに実行した項目を記載してある。実行項目の妥当性や有効性の検討については、今後評価が必要であり、改善・解決すべき課題である。

私達は、自分たちが少しでも飯舘の方々を支えられるようになるために、本稿が少しでも多くの方の目に留まることを願っている。また、ご覧になってくださった方々から更なるご指導を賜れるのであれば、これほど幸せなことはないと考えている。

最後に、本プロジェクトが少しでも飯舘の皆さんの力になることを願ってまえがきとする。

執筆担当者

相子 大海	新機能植物開発学研究室	修士一年
風見 奈穂子	遺体科学研究室	修士一年
小林 英樹	国際動物資源科学研究室	修士一年
佐藤 瑞基	国際動物資源科学研究室	修士一年
濱谷 美里	国際植物資源科学研究室	修士一年
細江 真優	国際情報農学研究室	修士一年
森口 美歩	国際情報農学研究室	修士一年

指導担当教員

溝口 勝 国際情報農学研究室 教授





大久保金一さん、溝口先生といいはな修士1年生

2. 活動記録および今後の予定

表 1. これまでの活動記録と今後の予定

日にち	曜日	時間	内容	備考
10月21日	金	15:00～	全体MTG(1回目)	
10月23日	日		大久保さん 東大へ →来る予定だったが、来られず	顔合わせ、紹介、軽く質問の予定 →大久保さん体調不良のため来学せず
10月26日	水	14:15～	全体MTG(2回目)	
			先輩へのインタビュー(担当ごと)	以下のように担当し、共有も行う ダニエル … 相子 小林研 … 濱谷、小林、佐藤 溝口研 … 森口、細江、風見
10月27日	木	12:30～	全体MTG(3回目)	大久保さんと電話の予定だった →発表に向けた話し合いに SKYPEは19時からの「いいはな」にて行う予定であった
		19:00～	15回「いいはな」MT	大久保さんとの
10月28日	金	14:55～	特論I 発表	
		17:00～	発表後少し話し合い	
11月1日	火	17:00～	全体MTG(4回目)	場所はこば研 質問と提案を考えた あとは交通手段
11月2日	水	16:00～	16回「いいはな」MTG	特論IIのため参加できない人多かった
11月4日	金		福島県への移動日	特に話し合いは行わず
11月5日	土		飯舘村 訪問	
11月6日	日		飯舘村 1回目訪問	溝口先生と行動 村内めぐり→大久保さん
11月9日	水	16:00～17:30	17回「いいはな」MTG	フェリスのこと M1参加者なし
11月10日	木	18:00～	全体MTG(5回目)	我々は今後何をすべきか M2の先輩とのすみわけは？
11月15日	火	19:00～22:00	全体MTG(6回目)	佐藤さんも交えて グループを暫定的に3つに分割 広報…濱谷、佐藤 パンフ…風見、小林 コネクト…細江、森口 相子は未決定
11月17日	木	13:00～14:00	パンフ組MTG	
11月21日	月	18:00～ 19:30～20:00	全体MTG(7回目) 大久保さんとTEL&SKYPE	各組の調査結果共有 大久保さんへの共有
11月24日	木	19:00	いいはなMTG	
12月1日	木	18:00～	全体MTG(8回目)	
12月3日	土	終日	合宿 with フェリス & M2	
12月4日	日			
12月14日	水	～14:00	いいはなMTG	
		14:30～	全体MTG(9回目)	
12月22日	木	17:00～	いいはなMTG	佐藤さんと濱谷2人のみ
1月4日	水	19:00～	全体MTG(10回目)	
1月6日	金		Deadline of draft report to advisors	
1月9日	月		全体MTG(11回目)	
1月10日	火	15:00～17:00	先輩方への発表(テレビ局来る)	提案、発表
1月13日	金		Presentation	
1月20日	金		Deadline of final report	
3月19日	日		イベント	
3月20日	月			

3. 前提・背景

3-1 原発事故

2011年3月11日に東日本大震災地震が発生し、その約1時間後に発生した津波によって福島第一原子力発電所は全交流電源を喪失した。その影響で原子炉を冷却できなくなったため炉心溶融（メルトダウン）が起こり、施設内に充満した水素が爆発した。

そのため原発から20 km圏内に住む地域住民に政府から非難指示が出された。しかし原発から30~45 kmに位置する飯舘村で本格的な全村避難が開始されたのは5月15日、事故発生から二か月も経った後のことであった。



図1. 福島第一原子力発電所3号炉が水蒸気爆発もしくは核爆発した瞬間

(<http://blog.goo.ne.jp/yampr7/e/3252e0611ebc1eabd36195cede8a2231>より引用)

写真は2011年3月14日午前11時1分)

3-2 避難

<経緯>

東日本大震災によって福島第一原子力発電所で事故が起こり、原子炉が損傷したり放射性物質が放出・拡散したりした。国は住民の命や身体の安全を確保するために原発事故直後から避難指示を出し、事故の深刻化に伴って徐々に避難指示区域が拡大していった。

<避難者数>

福島県で避難を余儀なくされたのは今回私たちが訪問した大久保さん宅のある飯舘村を含む右図の地域で（2016 年 10 月 28 日時点）、福島県の避難者数はピーク時で 164,865 人（2012 年 5 月時点）であり、現在も 84,289 人が避難されている。飯舘村では現在県内に 5,771 人、県外に 348 人の計 6,119 人が避難している。

<避難指示区域>

避難指示区域は、帰還困難区域（事故後 6 年が経過しても空間線量率から推定された年間積算線量が 20 ミリシーベルトを下回らない恐れのある地域）、居住制限区域（空間線量率から推定された年間積算線量が 20 ミリシーベルトを超える恐れがあると確認された地域）、避難指示解除準備区域（空間線量率から推定された年間積算線量が 20 ミリシーベルト以下となることが確実であることが確認された地域）に分けられる。飯舘村は 2012 年に多くの地域が居住制限区域とされ、一部の地域は帰還困難区域や避難指示解除準備区域となっていた（左図）。現在飯舘村は全域で居住制限区域と指定され、2017 年 3 月 31 日に避難指示が解除される（右図）。

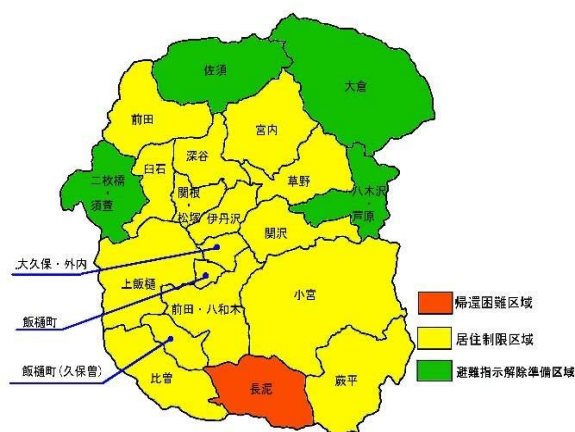


図 2. 2012 年の飯舘村の避難指示区域

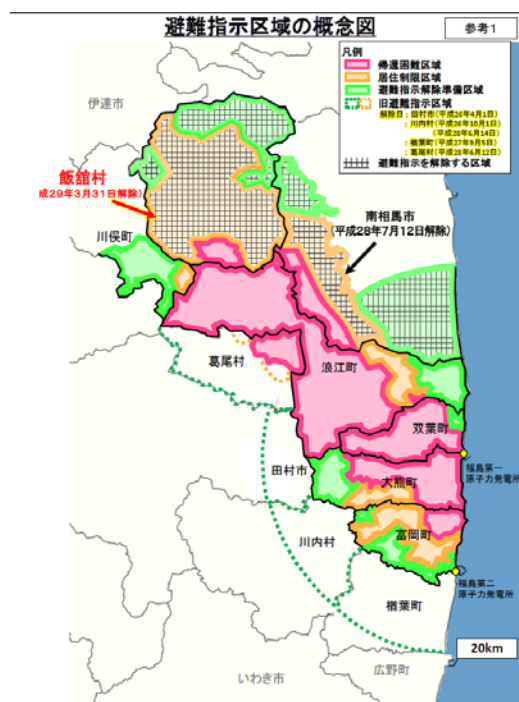


図 3. 現在の福島県の避難指示区域

（図 2 出典：<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/?p=3801>）

図 3 出典：

http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/kinkyu/hinanshiji/2016/pdf/0617_03c.pdf

3-3 大久保金一さんについて

＜大久保さんと飯舘村＞

大久保金一さんは1940年生まれの76才（2016年現在）男性である。1947年に飯舘村小宮地区萱刈庭（当時の地名は牧場）にご両親とともに入植し、以来2011年の東日本大震災までその地を大切に守りながら、母親とともに生活していた。大久保さんにとってその地は、幼少期に駆け回って遊んだり、ヨッツヅミの実を摘んで食べたりした思い出や、家族とのかけがえのない思い出がたくさん詰まった土地である。



図4. 大久保金一さん



図5. ヨッツヅミ

<大久保さんと花>

小学生の頃から大久保さんにとって花は、心を一番落ち着かせる存在であったという。花の咲く野草や木を植え、登下校の道では、花を眺めながら歩いていた。20歳の頃には、隣家のおじいちゃんから『お前はその年で、花が道楽か』と言われ、これを契機に、自分の人生は花と共にあるのだとの思いに至った。

<大久保さんのお仕事>

もともと大久保さんのお宅では稲作をしていたそうだ。しかし、国による減反政策の流れを受けて、葉たばこの生産に切り替えた。ところが、10年も経たないうちに葉たばこの生産も思わしくない状態になり、昔から好きだったという花卉の栽培を行うようになった。

<東日本大震災以降の大久保さんの生活>

2011年3月11日、東日本大震災が発生。同日に起こった福島第一原子力発電所事故は、それまでの大久保さんの生活を一変させることとなった。事故当初は避難区域から外れていた飯舘村であったが、3月15日には屋内指示が、4月22日には全村に避難指示が出され、5月15日に全村避難が開始された。これは原発事故から2か月も経ってからのことであった。

当時の大久保さんは足腰の弱った母コトさんとの2人暮らしであった。福島市内の仮設住宅に入居した大久保さん親子は、度々自宅の様子を見に帰っていた。そのたびに母コトさんは、また仮設住宅に戻らなくてはならないのかと悲しそうにしていたという。さらに、仮設住宅での慣れない生活やストレスにより、大久保さん自身も体調を崩すようになったこともあり、大久保さんは避難解除がなされる前の飯舘村に母と2人で戻り、生活を始めることを決断した。

<帰村後の大久保さんの生活>

震災以前に大久保さんが花卉の栽培をしていた時、好きな花ばかりを集めた花園が欲しいと考えるようになり、一人で花を植えて花園を作成していたという。そうした中で原発事故が発生。仮設住宅に入居した後も、度々自宅に帰って一人で花を植え続けた。帰村後も、自ら除染をしながら諦めることなく花を植え続けた。

そうして帰村してから約1年が経過した2013年の3月下旬、ふくしま再生の会理事長の田尾陽一さんと副理事長の菅野宗夫さんが大久保さんのことを伝え聞いて、放射線量を測りに行ったことを契機に、大久保さんはふくしま再生の会を知るようになる。菅野宗夫さんから「田植えをしてみないか」と言われた大久保さんは、飯舘村で生きていくための可能性を一つでも見つけるためにと引き受け、ふくしま再生の会との「協働」を始めた。そうして大久保さんは、自分の農地でふくしま再生の会と共に農地除染実験や試験作付けを行った。

※ふくしま再生の会とは、飯舘村の農家有志や県外からのボランティア、研究者らによって結成された非営利団体である。福島第一原子力発電所の事故によって破壊された生活と産業の再生を目的とし、被災地域の現場において、被災者と協働し、継続的な活動を行っている。活動内容は主に、放射線・放射能のモニタリングや除染方法の開発、農業再生のためのパイロットプロジェクト、新産業育成のためのパイロットプロジェクト、被災地域における住民の健康ケア、世界に向けて原発事故被害地域の情報発信である。



図 5,6 ふくしま再生の会の様子

出典：<http://www.fukushima-saisei.jp/aboutus/activities/>

ふくしま再生の会ホームページより

3-4 避難指示の解除について

2016年6月17日、原子力災害対策本部は、飯舘村に設定している居住制限区域及び避難指示解除準備区域について解除することを決定した。

これは、避難指示解除の要件である、

(1) 空間線量率で推定された年間積算線量が20ミリシーベルト以下になることが確実であること

(2) 電気、ガス、上下水道、主要交通網、通信など日常生活に必須なインフラや医療・介護・郵便などの生活関連サービスが概ね復旧すること、子どもの生活環境を中心とする除染作業が十分に進捗すること

(3) 県、市町村、住民との十分な協議の全てが満たされたことによる。

これにより2017年3月31日午前0時をもって、長泥地区を除く飯舘村内の全ての地区において避難指示が解除され居住が可能となる。長泥地区は引き続き帰還困難区域のままである。

<解除によって何が変わるのか？>

これまで「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」で、原則禁止されていたのは、以下の活動である。

① 区域内での宿泊（特例宿泊等※の制度に基づく宿泊を除く。）

※一定の要件を満たす、年末年始やお盆等の特例宿泊、ふるさとへの帰還に向けた準備のための宿泊等。

② 区域外からの集客を主とする事業

※区域外からの集客を主とする宿泊業、観光業など。

③ 区域内での宿泊者（特例宿泊等の制度に基づく宿泊者を除く。）の存在を前提に実施される事業

したがって、避難指示の解除後はこれらの活動が可能となる。

<避難指示解除が意味するもの>

避難指示は解除されるが、それは原発問題の解決を意味するものではない。人々の主な活動範囲については除染がおこなわれ基準値以下の放射線量となっているが、森林部分については林縁から約20メートルの範囲以外は除染されていない。また、除染作業により発生した大量の汚染土は、中間貯蔵という形で村内に積み上げられている。避難指示の解除は終わりではなく復興へ向けた一つの通過点でしかない。問題は山積みであるが、避難した住民たちの帰村に向けた動きや、訪問者の村への出入りが活発化するきっかけとなることを願う。



図 7. 除染によって大量に発生した、行き場のない汚染土の山。
(2016 年 12 月 4 日飯舘村内にて)

4. 活動経緯

<これまでの活動>

飯舘村で花壇づくりが始まったのは2015年現在の修士2年生が1年生の時、この農学国際特論Ⅰでの活動中のことである。先輩方の活動は、「大久保さんへの聞き取り」から始まる。先輩方が飯舘村で活動する中で最も重視したのは「大久保さんの想い」に寄り添った活動にすることであった。

4-1 先輩方から聞いた大久保さんのお話

3-3で述べたように、大久保さんは避難解除がなされる前に帰村して自宅での生活をはじめ、1年ほど経った頃、放射線量を測りに来た菅野宗男さんと出会った。この時にふくしま再生の会のメンバーとして、菅野さんと共に大久保さんのもとを訪れた人の中には、大学で研究を行う専門家が何人もいらしかったそうだ。そうした人たちが頻繁に自宅に来て、一生懸命飯舘村の復興のために考えてくれたことに、大久保さんはとても感動したのだと言う。そして、こうした人たちがここの土地を訪れたという記録を残したいと思うようになったのだそうだ。

このようなふくしま再生の会をはじめとする様々な方とのかかわりと、「この土地を花でいっぱいになりたい」という思いから、大久保さんは「マキバノハナヅノ計画」を考えるようになった。それは、ボランティアや震災後かかわった人々が集まることで、原発後のここでの経験を思い出したり、共に楽しい時間を過ごしたりできるような花園をつくるというものだ。そこには「お世話になった方々に恩返しする」ため、そして「原発事故の記憶を風化させない」ために、誰もが忘れられない花の風景を作りたいという大久保さんの思いが詰まっていた。こうした思いから花園のテーマは「10年後帰ってくる思い出の場所を作る」となった。先輩方は大久保さんのこうした思いを知り、マキバノハナヅノ計画をサポートしたいと活動を始める。

4-2 先輩の活動

先述のような大久保さんのお話をもとに、先輩方は「大久保さんの望む花園をデザインする」活動始める。先輩方の特論でのグループワークとしての活動は、『大久保さんへの聞き取り→コンセプト・アイディア提示→修正→双方の合意に基づくプラン決定→維持管理への課題解決→実施』という一連のアクションプランの中で花園のデザイン案の「アイディア提示」の段階までである。実際にマキバノハナヅノ全体のデザインを提案し、そのデザインの中でも飯舘村の形をした「いいたて花壇」については、完成に向けて現在でも「いいはな」を名乗り活動している。今冬、2016年12月3日-4日にはいいたて花壇の枠組みを作り終えており、花はなくともイルミネーションを取り付け、冬でも楽しめる花壇が出来上がりつつある。3月に大久保さん宅にて開催予定のイベントで花を植え、その後の手入れを除けばそこで花壇の完成を迎える計画である。

4-3 私たちが大久保さんから伺ったこと

以上のような大久保さんと先輩方の活動を知り、11月6日、大久保さんに詳しいお話を伺うため飯舘村を訪ねた。夜行バスと公共のバスを乗り継ぎ、さらに車で進んだ先に大久保さん宅はある。大久保さん宅ではまず土地の案内をしていただいた。どこに何が植わっているのか、何にどのような思い入れがあるのか、将来どこに何を植え、どのような風景にしたいのかなどを丁寧に教えてくださった。お話を聞き、そこが大久保さんのこれまでの思い出と将来への希望が詰まった場所なのだと理解することができた。

しかしながら、そうした希望がある一方で、家の中でお話してみると、課題も多いことが明らかになった。いいたて花壇はバラで作る計画であったが、バラは管理が非常に大変であり、大久保さん自身はバラを育て上げることにこれまで成功したことがないという。また、大久保さんには1年を通していつ来ても見て楽しめる花園にしたいという思いがあり、複数の花を植えられるようにしたいということであった。今年度には先輩方も卒業し、花園計画を進める人材、そして完成後に管理をする人材ともに、現在目途が立っていないことが大久保さんにとって大きな不安要素であることが分かった。

また、花園づくりをするにあたり、きっかけは既述したようにボランティアなど震災後にかかわった人々への「恩返し」と、それにより原発事故の「記憶を風化させないこと」ではあったが、花壇づくりを進めるうち、その思いにも徐々に変化が生じているようであった。「感謝」や「震災後の記憶」を、花園を通して伝えたいという思いは確かにあるのだろうが、今はただこの花園を、花を愛する人々に訪れてもらいたい、ここを訪れた人々と花について語り、そして他の場所ではできない思い出を作してほしい、という思いが最も強いのだという。この土地は大久保さんにとって思い出と希望の土地である。その思い出と希望を、大久保さんはより多くの人と共有したいのかもしれない。



図 8. 11 月 6 日、飯舘村を訪問。大久保さんにマキバノハナヅノを案内していただいた。
(撮影：溝口先生)

5. 活動構想

＜自分たちが考えたこと、何をやればいいのか＞
全体の活動の流れとして私たちは、以下のような段階を考えた。

表 2. 我々の活動の流れ

10 月下旬	現状把握 ↓
	自分たちの活動内容検討・決定 ↓
12 月上旬	大久保さんに対して活動内容の提案・議論（12 月 3 日、4 日） ↓
12 月下旬以降	議論を受けて活動内容の修正、決定 ↓ 活動を実行へ移す

＜現状把握＞
活動内容の決定をする際、以下のような思考プロセスを経た。

- | |
|---|
| ①大久保さんの意見を尊重することが大前提
②去年の先輩の意見や取り組みを考慮に入れる
③そのうえで、あくまで我々が主体的に挑戦したいことを選択する |
|---|

5-1 大久保さんの意見

私たちが大久保さんに直接お会いするまでは、大久保さんは「福島復興を支援してくれたボランティアの方々に対して、再び彼らが集まれる綺麗な花がたくさん咲く憩いの場を作り上げることで、恩返しをしたい」と考えていると想定していた。これはこれまでの活動を記した資料から得られた知見である。

しかし、聞き取り調査を重ね、大久保さんと親しい間柄になっていくにつれて、大久保さんが「ボランティアの人に限らなくとも、花を愛する（できれば若い世代の）人に来てもらいたい」という意思を持っていることが明らかとなった。大久保さんの考え方が時間と共に遷移したのか、あるいは原因が私たちの聞き取り調査の力に問題があり、私たちがこの活動に参加する前から変わらずこのような意思を持っていたかどうかについては、再確認する必要があるが、12 月上旬の現状として、大久保さんは上記のような思いを抱いていた。

5-2 先輩方の思い

先輩方はこれまでの自分たちの活動結果を有効に使ってほしいという思いから、活動の一部を引き継いでほしいという思いがあるように感じた。一方で、ただ引き継ぐだけではなく、自分たちがやりたいことに挑戦するべきであるとも述べていた。先輩方がこれまで行ってきた活動は、主に以下の 2 つである。引き継ぐことが望まれているのは主にコネクトの活動であった。

- ・飯館花壇づくり
- ・我々と共に活動してくれる人々を探す活動（これを「コネクト」と名付けた）

また、先輩方の活動は現在も継続中である。したがって、活動内容が重複してしまうことがないように留意すべき必要があった。

5-3 私たちの結論

5-1と5-2の項目を踏まえて、私たちは、「広報活動に力を入れるべき」と考えた。
(図を参照)

これは、大久保さんの意思を尊重しつつ、先輩方の活動と重複することなく有機的に結びつき、より大きな効果を得られるようにと考えた結果である。

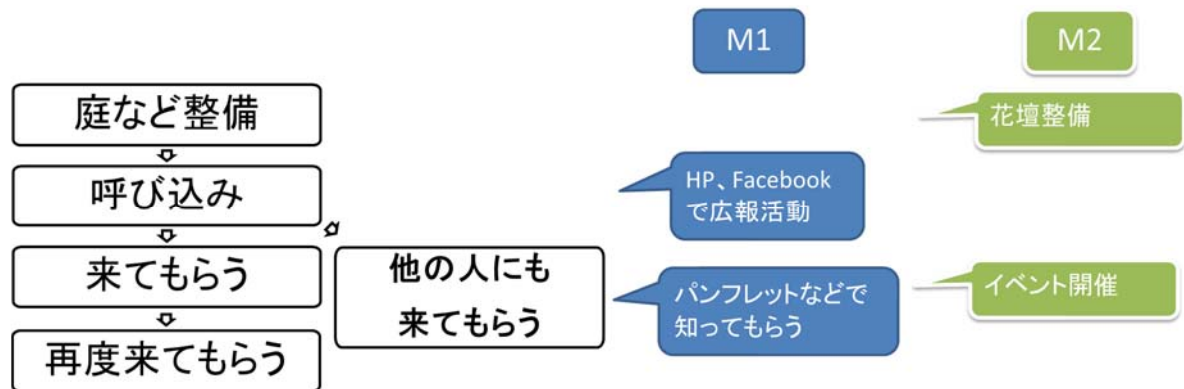


図9. 我々の活動と先輩の活動との位置づけ (イメージ)

詳細については後述するが、活動項目としては、以下のようなものを実施することとした；

- ・Facebook、HPを用いた広報活動
- ・大久保さん家のことを記したパンフレットや花の図鑑を作製し、来場者の理解を助ける
- ・我々と共に活動してくれる人々を探す
- ・フォトコンテストなどイベントを開催する（2日間のようなものでなく、中長期的）

<課題>

・呼び込みが成功したとして、実際に人に来てもらった際に、見てもらう草花が少ないのが現状

- ・交通手段が少ない、大久保さん家までの交通手段はない

→我々が同行する以外にも方法があるとよい

（初めての人が一人で大久保さん家に向かうことはないから、再度来る人向けに。

再生の会の方と協力する事も検討）

- ・花という性質上、冬に人を集めるのは厳しい。また積雪量も少なからず大きい。

→ライトアップなどは現在行っている

6. 実施したこと、今後の展望

＜プロジェクトの全体像～各活動の位置づけ～＞

私たちは今年度の活動内容として、マキバノハナヅノをより楽しんでもらえるように工夫をするとともに、広報活動に力を入れることとした。実際にマキバノハナヅノに来場した人が何度も訪れるようになり、マキバノハナヅノの管理をサポートする一人として継続的に関わるようになることを最終的な目標として、それまでの過程を以下の4つの段階に分けて考えた。

- ①（特にそれまで知らなかった人に）マキバノハナヅノのことを知ってもらう
- ②マキバノハナヅノについて深く知ってもらう
- ③マキバノハナヅノを訪問し、楽しんでもらう
- ④訪問後もマキバノハナヅノに親しみをもち続けてもらう

次の図は、私たちの活動内容を上の4つの段階に分類し、それぞれの活動の狙いを明確化したものである。Facebook ページでは、日々のマキバノハナヅノの情報を発信し、その拡散効果を利用して、マキバノハナヅノのことを知ってもらうきっかけをつくる。そして、マキバノハナヅノの存在を知った人に対しては、ホームページ上でより詳しい情報を発信する。実際にマキバノハナヅノを知り、訪問してくれた人たちに楽しんでもらえるように、パンフレットや図鑑の作成、訪問時に撮影した写真を SNS に投稿してもらう形式のフォトコンテストの企画を行っている。さらに、マキバノハナヅノで開催されるイベント（イベントの内容についてはいいはなで活動する M2 のメンバーが検討中）に、マキバノハナヅノでの活動に興味を持ってくれそうな人を招待し、つながりをつくっていくことも考えている。そして訪問後には、ホームページ上のフォトギャラリーや、大久保さんとのツーショット写真を掲載するコーナー、定点カメラを利用して発信するマキバノハナヅノの日々の様子等を見られるようにすることで、マキバノハナヅノに愛着をもち続けてもらえるようにする。

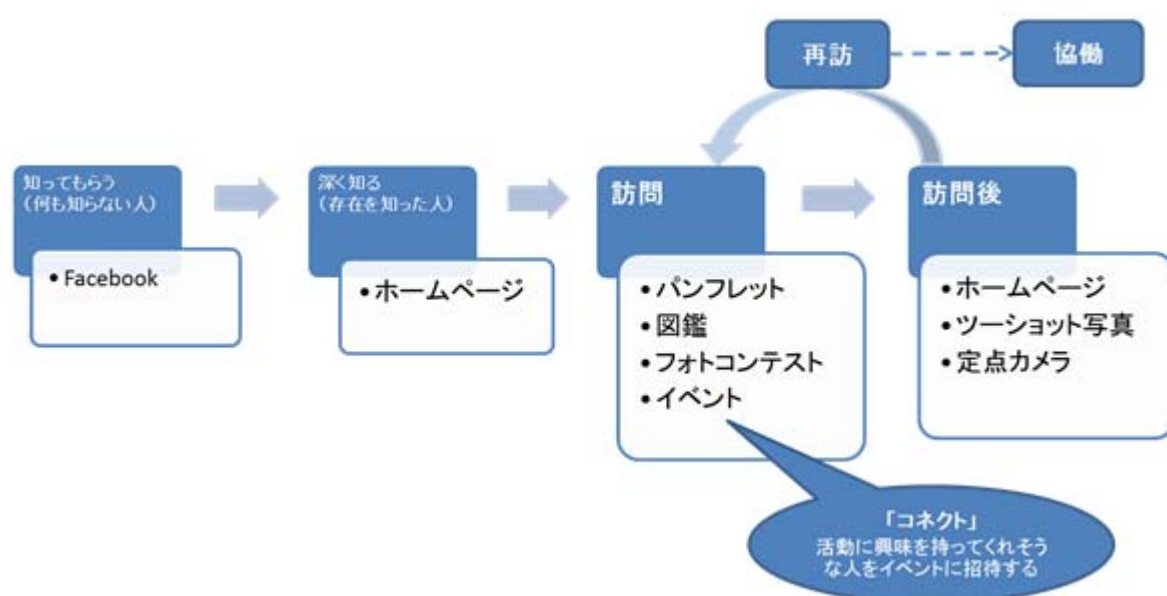


図 10. プロジェクトの全体像（イメージ）

6-1以降では、これらの各活動について詳しく述べていく。

6-1 Facebook ページ

<Facebook とは>

離れている友人とも近況を共有し合い、交流することができるソーシャルネットワークであり、写真や文章を投稿し、特定あるいは不特定多数の人々に閲覧してもらうことができる。Facebook では、個人のアカウント以外に、Facebook ページというものを作成することができる。こちらは Facebook を利用していない人にも閲覧してもらうことが可能であり、企業や団体の PR の目的でよく利用されている。

<Facebook ページの目的>

今回、私たちの班では以下の 3 点を達成するために、後述の HP と合わせて、Facebook ページを作成するにいたった。

- ①日々のマキバノハナゾノの様子を気軽に発信する
- ②より多くの人にマキバノハナゾノのことを知ってもらう
- ③HP の存在を知ってもらうきっかけにする

<作成した Facebook ページ>

私たちが、「いいはな」という飯舘村での M2 の先輩方の活動グループ名を引き継ぐ形で作成したのが、こちらの Facebook ページである。



図 11. いいはな Facebook ページ



図 12. いいはな Facebook ページ投稿例

大久保さんのお宅を訪問した時の様子や、季節の植物、イベントの様子等について、写真を添えて随時報告をしていく予定である。合わせて、ホームページのリンクを紹介し、興味を持ってくれた人により詳しい情報を提供できるようにする。

<今後の Facebook ページの運営>

大久保さんご自身は Facebook を利用されていないので、当初は私たち特論Ⅰのグループが中心となり、大久保さんのお宅を訪問した際の様子や、定点カメラを利用した季節の風景などを発信していくことを想定していた。しかし、ふくしま再生の会のメンバーの方で、Facebook を活用して、大久保さんの活動の広報に力を入れようとされている方がいらっしゃる事が分かり、今後はふくしま再生の会の方々と共同で Facebook ページを管理していくことも視野に入れている。

1) フォトコンテスト

Facebook ページを利用した企画

—「私のベストショット」 フォトコンテスト—

大久保さんの花園の魅力をより多くの人に知ってもらうため、Facebook を利用したフォトコンテストを企画した。

<企画内容>

訪問した人に魅力的な写真を撮ってもらい、「私のベストショット」として一枚を選んで我々の Facebook ページに投稿してもらう。そして、一定期間（季節の境目、年4回）が経過するごとに、その時点での「いいね！」数のランキングを発表し、最も多くの「いいね！」を集めた写真はHPのトップページの背景として採用する。

メリットとして以下の3つを期待している。

- ①より多くの人、特に若い世代への宣伝効果
- ②訪問者に楽しみながら参加してもらうことで花園への愛着を深めてもらうこと
- ③HP や Facebook に魅力的な写真を増やすこと

Facebook の「いいね！」機能による投票方式により、投票と同時に拡散が進む。ベストショットとして投稿された花園の美しい写真が、多くの Facebook ユーザーに広まることで、花園の存在やその魅力が若い世代を中心に伝わることを期待できる。

コンテストではあるが、競うことよりも周知効果をメインと考え、商品を設けることは考えないこととした。また、写真の投稿から評価までの期間が不平等になることについてもこだわらないこととした。

<今後の課題>

この企画をより盛り上げていくためには、大久保さんの関わりが必要である。投稿された写真へ大久保さんからコメントが来たり、大久保さん自身がフォトコンテストに参戦したりできれば、この企画の魅力度も増すはずである。



図 13. 大久保さんの「いいね！」

6-2 ホームページ (HP)

前述の通り、我々の活動において重視したことは「大久保さんの想い」に寄り添うことであった。彼の想いである、「花を愛する人たちに集まってもらいたい」や「花壇を訪れた人たちと花について語り、思い出を作ってほしい」をどのようにサポートできるのか。既に「いいはな」が足を運んでくれる人たちの為に、花壇を作成している。そのため我々はどのようにすれば大久保さんのその花壇に多くの人々が集まってくれるかを考えることが、「大久保さんの想い」に寄り添うことであると考え、それを自分たちの目標と位置付けた。

大久保さんの花壇に多くの人が集まるにはどうしたら良いのか。我々は、大久保さんの想い・活動を世の中に発信すること、それこそが多くの人が大久保邸に足を運んでくれる要素であると考えた。そこで我々が用いたツールは HP と Facebook である (Facebook については前述の通り)。ここでは HP を作成することになった経緯を述べる。大久保さんの花壇に多くの人々が来てもらうには以下の点を満たす媒体でなくてはならないと判断した。

- ①不特定多数の人が閲覧できる媒体でなくてはならない
- ②「大久保さんの想い」を文章で伝えられる媒体でなくてはならない
- ③写真や動画などをアップし、活動自体を発信できる媒体でなくてはならない

以上の項目により、我々は発信媒体として HP を採用することにした。しかし、HP には当然ながらデメリットも存在する。そのページの存在を知っている、もしくはそれに関連したことに興味がないと検索・閲覧できない、ということだ。これは Facebook ページを作成し、多くの方々にシェアして頂くことでカバーすることにした。つまり、Facebook によって多くの人に知ってもらい、HP によってもっと深く大久保さんや自分たちの活動を知ってもらうことにした。

HP には「私たちの活動」、「大久保さんの想い」、「飯舘村の歴史」、「フォトギャラリー」、「モニタリング」、「イベント情報」、「大久保さんちマップ」、「ブログ」、「花図鑑」、「ツーショットギャラリー」以上 10 個のコンテンツを盛り込んだ。これらはどれも大久保さんの想い・活動を知ってもらい、興味を持ってもらい、現地に足を運んでもらい、思い出を作ってもらい、また足を運んでくれるためのものである。

以下既に作成した HP である。



飯舘村へのアクセス

「自動車」

東京-福島西IC-国道114号線-川俣町-県道原町川俣線---約3時間30分

仙台-福島西IC-国道114号線-川俣町-県道原町川俣線---約2時間

図 14. HP (トップページ)



図 15. HP (私たちの活動)



図 16. HP (大久保さんの想い)



図 17. HP (フォトギャラリー)

1) ツーショットギャラリー

HP には、あえて通常のフォトギャラリーのページとは別に、大久保さんとのツーショットの写真だけを集めたページを作ること考えた。

<内容概要>

花園の中のお気に入りの花とともに、大久保さんとの笑顔のツーショット写真を撮ってもらう。撮った写真を送ってもらい、日付や団体名とともに HP 上にアップする。

狙いは次の三点である。

- ①ツーショットとすることで、訪問者と大久保さんの個人間でのつながりを強調すること
- ②ツーショットの笑顔の写真が画面にあふれることで、ホームページとしても大久保さんの花園としても魅力をアピールできること
- ③どれだけの人が復興に携わってくれたかを記録し、蓄積してゆくこと

訪問者の方には、「団体の中の一人として大久保さんに会いに行った」という思い出ではなく、「大久保さんと私が個人的なつながりを持った」思い出として、記憶に残してほしいため、あえてツーショットであることにこだわっている。また、ツーショットの写真だと大久保さんも、照れるためか、笑顔になりやすいため、より素敵な写真が撮れる。大久保さんは恥ずかしがっていたが、賛成をいただいている。

顔写真が HP 上に公開されるのであくまでも任意参加とするがより多くの写真が集まることが望ましい。複数回訪問する場合、なるべく訪問の度ごとに撮影していただき、訪問の記録としていただく。

任意ではあるが、写真とともに日付や団体名・学校名、コメントを載せることも検討している。例えば HP を見て参加を検討している人が、以前の参加者を知る手掛かりとしてこのページを見ることも考えられるためである。

<今後の課題>

当然ながら我々が久保さん宅に常駐することは不可能であるため、ツーショット写真の撮影は訪問者と久保さんの、この企画への理解度に大きく左右される。よって、直接話すことのできない訪問者の方々に、いかにこの企画への認知、理解をしてもらうかが鍵となる。

現在考えている方法は、

- ①訪問者が主体となり写真を撮影する。撮影した写真を、Gmail または Facebook を通して我々のもとへ送っていただき、我々が HP にアップロードする。
 - ②大久保さんに主体となっいただき、大久保さんの家のタブレットで写真を撮影する。撮影した写真を大久保さん、あるいは我々や再生の会の協力者が HP にアップロードする。
- などである。

顔写真を扱うため、データの取り扱いに気を遣う必要があるだけでなく、訪問者に我々が信頼する団体であることをアピールする必要もある。



図 18. HP (ツーショットギャラリーページ)

2) 定点カメラ

大久保さんの自宅近くにある丘の上に定点カメラを設置し、大久保さんの土地に咲く花を撮影している。そこで撮影された写真は私たちが作成したホームページに掲載している。これらの目的は以下の3つである。

- ①遠方からでも、大久保さんの土地に咲く花の様子を観察できるようにするため
- ②大久保さんの土地に咲く花の様子の変化を記録するため
- ③多くの人に大久保さんの土地に咲く花の様子を知ってもらうため

現在あげられる問題としては以下の3つである。

- ①花壇全体を見ることは可能だが、花一つ一つを見ることは不可能
- ②カメラの管理・維持
- ③プライバシーの保護について

今後は、これらの問題の解消に努め、より充実した定点カメラの利用を目指す必要がある。また、花の増殖に伴い、定点カメラの数を増やしていく予定である。



図 19. 丘に取り付けられた定点カメラ

6-3 パンフレット・図鑑

1) パンフレット

Facebook やホームページなど、何らかの方法で興味を持ってくださった方々が、大久保さん家の状況をさらに知ってもらい、もっと楽しんでもらうことを狙いとしている。パンフレットに掲載する内容は、以下の9点である。

1. 大久保さんの紹介
2. 飯舘村の歴史
3. 大久保さんの庭の図
4. 花の紹介
5. マキバノハナゾノ計画について（修士2年の先輩の活動内容紹介）
6. イベント情報（HP や Facebook の URL 掲載）
7. 協力団体
8. アクセス
9. 主催・問い合わせ先

パンフレットは大久保さん家やその周辺、あるいは私たちの大学周辺に設置する。基本的には、来てくれた方々へさらに詳しい情報や話題を提供するためのものであるが、呼び込みの際にも使用することを想定している。またパンフレットは PDF 化して HP にも掲載することで、ネット上で事前に見てもらえるようにする。



パンフレット案

図 20. パンフレット（案）

2) 図鑑

大久保さんは彼の庭にある草花をもっと知ってほしいという願いをもっている。花好きな人がもっと増えてほしいという願いもあるのかもしれない。

そこでその一助となるべく、パンフレットに掲載しきれなかった草花を含め、大久保さん家周辺に生育する草花を図鑑という形でまとめることとした。彼自身、既に草花の写真は収集してあるとのことなので、図鑑作成に当たっては大久保さんと共に、彼の中にある理想の図鑑を構築していく方針である。大久保さんからその撮影済みの草花の写真を拝借して掲載し、解説には花の名前や開花時期だけでなく大久保さんから伺った思い出のエピソードなどを盛り込むことで大久保さんの庭ならではの図鑑を作製したいと考えている。

こちらの図鑑は大久保さんの家に設置する予定である。狙いは、パンフレット同様に大久保さん家に来た人がさらに楽しめるようにすることで、ポケットサイズにすることで図鑑を持ち歩きながら大久保さんの家の庭を散策してもらいたいと考えている。また、後述するフォトコンテストなどでも役に立つのではないかと期待している。この図鑑を通して草花の知識だけでなく、大久保さんという方についても知っていただくことができれば幸いである。



図 20. 図鑑 (案)

6-4 コネクト

<動機・目的>

私たちは先輩方の活動を知る中で、飯舘村について、大久保さんについて、より多くの人に知ってもらいたいと思うようになった。先輩方の今後の活動の一つとして3月に大久保さん宅でのイベントを開催することを知った私たちは、そこに新たに人を呼ぶことを考えた。コネクト班は、イベントにこれまで大久保さんに関わりのなかった人々に声をかけることで、大久保さんと先輩方の活動について知ってもらうとともに、コミュニケーションにより活動を活性化させるヒントを得ることを狙いとする。また将来的には、ともに活動をする仲間を増やすことにつなげたいという期待がある。これは初めて大久保さん宅を訪ねた際、土地が一人で管理するには広すぎると感じたこと、実際に大久保さんが管理の大変さを訴えていたことから、管理者を増やすことの重要性を感じたことに由来する。

<対象者>

新たにイベントへ呼ぶ参加者として、私たちは福島県内在住であり、比較的時間に余裕のある大学生を想定した。飯舘村や大久保さん自身について知ってもらうことはFacebookやHPでも可能であるため、イベントではすでに活動に好意的な人や飯舘村と何らかの関わりのある人など、同志となりそうな人を中心に声をかけたい。いいたて花壇づくりやマキバノハナヅノ計画への協力者を募るのであれば、近距離に住んでおり、高い頻度で通うことができる福島県民が適している。また、実際に花壇づくりをすることを考慮すると、ある程度の時間的余裕と体力が必要であるため、大学生が最も好ましいと考えた。

<イベントについて>

目的：震災復興への感度の高い団体をマキバノハナヅノ支援者にすること

対象：震災復興への感度の高い団体（少数）

日時：3/19(日)07:30-3/20(月祝)20:00

参加費：14000円(東京)

定員：先着40名程度

表3. 参加人数の予想（濱谷作成）

東京大学	フェリス	福島大学	再生の会	個人	関連機関	メディア	合計
7~14人	5人程度	5人程度	5人程度	5人程度	5人程度	5人程度	37~44人



花仙人と作る”いいたて花壇”

飯舘村小宮地区に、復興のシンボルとなる万紫千紅な花園を作ろうと活動している、
一人の村民(大久保金一さん)がいます。
「震災後にお世話になった人への恩返しをしたい」
「土地の歴史、震災の記憶を、人びとへ伝えたい」
私達のグループは、大久保さんの思いをサポートすべく、共に花園計画を進めています。

2017年3月、一緒に花園を作ろうと、イベントを企画しています。
みなさんも、花園造りに参加しませんか？

◆スケジュール 3月19日(日) 7:30 東京大学農学部正門前集合 13:30～17:30 飯舘村での作業 18:30～19:30 夕食(川俣町 新川) 20:00～ おじまふるさと交流館 宿泊 3月20日(月) 08:30 おじまふるさと交流館 出発 09:30～12:00 飯舘村での作業 12:00～14:00 芋煮会 20:00 東京大学農学部 解散	◆内容 花壇造り作業、芋煮会、交流会 など ◆場所 開催場所：大久保さん宅(飯舘村小宮字萱刈庭) 宿泊場所：おじまふるさと交流館(川俣町) ◆参加費 15,000円 (交通費・宿泊費・懇親会費・2日目の朝昼飯代) ※途中からの参加・退出の場合はご相談ください。 参加のご連絡、ご質問等は、2/19(日)までに いいはなプロジェクト tokuron1.itate@gmail.com まで。
--	---

図 21. イベント案内 (いいはな修士 2 年生作成)

<現状・課題>

現状私たちの中に福島大学の学生と関わりを持つメンバーはいなかったため、インターネット上で情報を探した。先輩方を含む我々はその中で特に「ふるさと学級いいたて」に興味を持っている。

福島大学の中でも飯舘村と関わる団体は複数存在し、また、福島県内の他の大学も検討したが、大久保さん宅の周囲でイベントを開催するとなると、一度に呼び込むことのできる人数には限りがある。そのため今回私たちから呼びかける団体は1団体(5～10人程度)が現実的であろうという結論に至っている。イベントは3月開催予定であるが2016年12月時点では具体的な日時や内容が決まっていなかったため呼びかけることができていない。今後、メールを送り、お互いに情報交換をしながらイベントへ誘うという流れになるだろう。そのなかで、先

輩方のイメージするイベントを正しく理解し、相手方へ伝えるよう細心の注意を払う必要があるだろう。

<今後>

先輩に確認の上、年明けに「ふるさと学級いいたて」宛てにメールにて連絡をする予定である。また、イベントを主催するにあたり参加者管理をする必要があるため、今後本格的な声掛けを始める際には、申込フォーム作成や確認メールなどの準備も必要になってくるであろう。

7. 感想

相子大海 新機能植物開発学研究室

まずは今回の活動を通してお世話になりました、大久保金一さん、溝口先生、「いいはな」のメンバーの方々、フェリス女学院大学の高雄先生をはじめとする学生の皆さん、そして活動を共にしたメンバーのみんなに感謝申し上げます。

自分がこのテーマを選んだのは、東日本大震災の被災地を訪れたことがなかったからです。被災された方々がどのような体験をされ、どのように感じ、どのような想いで復興に向けて歩んでいるのかを知りたかったのです。今回の飯舘村訪問でたくさんの人に出会い、多くのことを聞く、という個人的な目標は果たせませんでした。しかし大久保金一さんという強い想いを持った方、同じように都会に住みながら授業を通して被災地を知って活動しているフェリスの学生の皆さんとの出会いは、自分の被災地に対する考え方を変えてくれるものでした。少しでも復興の役に立ちたい、被災地やそこに住む人のことを多くの人に知ってもらいたいと考えるようになり、そういった意味では今回の活動内容は非常に有益なものであったと自負しています。

しかしまだ多くの課題や改善すべき点があり、活動を継続していく必要があります。そして活動を続けていくことこそが、お世話になった方々への恩返しとなるのではないかと感じています。

風見奈穂子 遺体科学研究室

私がこのテーマを選んだ理由は2つあります。1つは被災地に行って何か手伝いをしたいと以前から思いながらもなかなか行く機会がなかったため、5年以上が経ってしまいましたが今回このテーマを選択することで何かできるのではないかと考えたからです。もう1つは、6月に一度先輩に飯舘村へ連れて行っていただき初めて被災地の状況を実際に目にし、現地の方のお話を聞くことができました。そして実際に目にしたりお話を直接聞いたりしたからこそ感じるものが多くあり、直接現地に赴くことの大切さを知りました。私は被災地に知り合いもいないため、この活動に参加することで多くの方のお話を聞いたり現地についてもより深く知ることができるのではないかと考え今回参加を決めました。

活動を通して感じたこと、学んだことは多くありました。まず飯舘村を訪問して感じたことについて。村の中の夥しい数のフレコンバックや切り崩された山を見ると居た堪れない気持ちになりました。

。また、まだ村には住めないため日中にも関わらずどの家もカーテンが閉まっており、人気のない家がただ並んでいるだけの光景はとても異様でした。関東で生活をしているとどうしても震災のこととは疎遠になってしまうため、未だに震災の影響を受けている人がいるのだということに改めて実感する機会となりました。

また今までは何かしたいとただ漠然と考えていましたが、実際に着手してみると自分たちの手で何かすることがいかに大変かを実感しました。大久保さん宅は僻地にあるため私たちの活動に興味を持ってくれた人をどのように招待したらよいか考えたり、自分たちは学生なので今後何年も継続して活動に参加できる保証はなくそのことも考慮していかなければならないといった、活動を始めるまで全く考えもしなかった問題が数多くあることに気付きました。さらに、強い想いをもった人とコミュニケーションを取りながらその課題の解決を図るといった活動は今回が初めてで、その人の想いをどのようにしたらより正確に実現することができるか考えたり、多くの人を巻き込みながら活動をしていくことの難しさも実感しました。

今回大久保さんの花壇づくりの支援という形で被災地に関わらせていただきましたが、実際に飯舘村を訪問して学んだことは自分の財産になると思います。この活動を少しでも多くの方に知ってもらうことで大久保さんの想いを届けることができればと思います。

小林英樹 国際動物資源科学研究室

活動を開始した当初は、東日本大震災や熊本地震が発生した際に、何も行動できなかったことを悔いていたこともあり、復興という活動に漠然と興味を持っていました。また、ケースス

タディではなく、自分たちの活動の成果が有形の物として残るようなことがしたいという思いもあり、これら二つの理由から私は活動への参加を決めました。

今回の活動を通じて痛感したことは、「現場・現地に行かないとわからない場合がほとんどである」ということです。「避難が喚起されている地域だから何となく人は少ないだろう」。

「人がいないから土地は荒れ果てているのだろう」。「そこに住む人や復興の活動をする人たちはおそらく国や行政などに対して不満を抱いているだろう」。福島県飯舘村に訪れる前に考えていたことはどれも誤ってはいませんでした。しかしながら、「どのくらい人がいないのか」、「荒れ果てているとはどういうことを指すのか」、「行政に不満を持つのはなぜなのか、行政に対して何を望んでいたのか」、などということをはじめ、自分たちがある程度以上のことを考えようとしていなかったということに気付かされました。知らないから考えが及ばないということは仕方のないことかもしれませんが、知ろうとする態度を持つことは大切にすべきことであり、またその好奇心を満たしてくれる場所は現場に存在するのだということを知りました。知見が少し、広がったように思います。

また、このことに関連して、自分たちができることがいかに小さなことであるかをも体感しました。活動の方針や案を議論している段階ではアイデアがいくつも湧いてきて、自分たちは何でもでき、社会やコミュニティーに大きく貢献できるような思いを抱いておりました。しかし、現実には時間的、資金的制約などをはじめ、様々な障壁によって想定通りに物事は運ばないのです。現実はそうは甘くないことは、わかっていたつもりではありましたが、その理解は全くの不十分であることを思い知りました。

最後に、私達が自由に活動できるように様々な面からサポートしていただいた関係者の方々に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

※反省、後輩に向けて

- ・有意義な活動ができるように、まず既に活動を行っている人々のことを知り、連携を図ること
- ・議事録は、日付ごとにまとめるのはもちろん、活動ごとに逐一整理すると次回の議論がスムーズ

例) パンフレット、コネクト、HP などの活動があったとしたら、MTG ごとの議事録とは別に、HP の議論 だけを時系列でまとめた word などをファイルとして作成しておく

- ・全体の意見を統一しておき、関係者や第三者から話をされても、グループとしての総意を伝えられるように活動する

佐藤瑞基 国際動物資源科学研究室

私が飯舘村を初めて訪れたのは 2016 年 6 月の終わりころでした。昨年の特論飯舘グループの先輩方が飯舘に後輩を連れて行くという募集がかかり、参加を決めました。津波の被災地を巡るツアーに参加したことはありましたが、原発事故後の福島県に足を運んだことがなかった私は、単純な興味・好奇心から事故後の地域の様子を見てみたいと思ったためです。

東日本大震災直後には度々ニュースに名前が挙がっていたため、飯舘村が原発に何らかの影響を受けたことは知っていました。ですが、他にもたくさん影響を受けた市町村はありましたし、5 年も前のことでしたので、当時の私は原発との位置関係も、避難指示の詳しい内容も知らない状態でした。

初訪問は意外とあっさりとした印象でした。それは放射線本体を実感できなかったからなのだと思います。放射線は目に見えず、感じることはできません。ガイガーカウンターが示す数値も、果たしてそれが高い値なのか低い値なのか、高いからといってどんな影響があるのか無知ではピンと来ないのです。そしていくら説明されてもピンと来ないのだと思います。

「体感はできないがどうやらあるらしい何か」という、にわかには信じられないものの影響で街の様子が大きく様変わりする。村内のあちこちに、汚染土の詰まったフレキシブルコンテナバックが積み上げられ、客土のために山が消える。そんな、なんとも不思議で不可解で、腑に落ちない感情が、原発の被災地に共通するものなのだろうと強く感じました。

特論のテーマを決める段階にて、個人的にはいささかのためらいがありました。原発という

賛否の分かれる難しい問題に取り組むには、生半可な気持ちではなく覚悟を持ってかかわらなければいけないという気負いがあったためです。センシティブな問題であるためにかなりの神経を使う必要があるだろうという勝手な先入観もありました。

しかしながら、今回の活動を通して飯舘村から感じたのは、明るく前向きなエネルギーでした。「若い世代が関心を持ってわざわざ足を運んでくれるだけで嬉しい」と私たちを歓迎して下さる、暖かくフレンドリーな村民の方々がたくさんいらっしゃり、その心の中には情熱が秘められていました。

今回私たちが取り組んだように、若い世代にどんどん訪れてもらい関心を持ってもらうことが、復興を盛り上げる力になると思います。まずは知ってもらうこと、訪れて自分の目で見てもらうこと。そうして、村民の方々と楽しい思い出を作ること。それだけで十分なのではないでしょうか。是非とも気軽に足を運んでみて欲しいと思います。

濱谷美里 国際植物資源科学研究室

2011 年 3 月に東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が発生して以来、ニュースで報道される被災地の様子を目にすることはあっても、私は現地に足を運ぶことをしてきませんでした。すでに 5 年の時が経ってしまいましたが、実際に現地の様子を自分の目で見てみたいという思いと、何か少しでもお役に立てることがあるのならという思いから、飯舘村でのグループワークに参加することにしました。11 月に初めて飯舘村を訪問した時には、そこに家が並び、学校があり、お店があるのに、そこにいるはずの人がいないという不思議な状況に、はじめて訪れる場所とは思えないような寂しさや悲しみを感しました。しかし、同時にそこでの暮らしを取り戻そう、故郷を守ろうという熱い思いを持った人々との出会いもありました。今回のプロジェクトの拠点となっているマキバノハナゾノの太久保さんも、土地を大切に、行動を起こそうとしている方の中のお一人ですが、他にもふくしま再生の会の方々をはじめ、村での暮らしを取り戻すために尽力なさっている方々にお会いできたことは、微力でも責任を持って今回の活動に取り組みたいという自分の中の思いを強めました。このレポートを書き終えるまでに取り組んできたことは、これから続いていくはずのマキバノハナゾノでの活動のほんの一部です。より多くの方にマキバノハナゾノの魅力を伝えていくお手伝い、そして太久保さんの想いを伝える場所を形にするお手伝いを、今後も私にできる形で続けていけたらと思っています。

最後に、太久保金一さん、溝口先生、ふくしま再生の会の皆さま、1 年以上活動に取り組まれてきた「いいはな」の先輩方、高雄先生はじめフェリス学院大学の皆さま、今回のグループワークを通じてお世話になった皆様に心より感謝いたします。

細江真優 国際情報農学研究室

私は縁あって、大学の 4 年間を高知県で過ごしました。東日本大震災時、私は福岡におり、ニュースで流れてく映像や新聞の見出しをどこか他人事のように感じていたのだと思います。しかしながら、その感情は高知県に移り住んで大きく変わりました。大学の入学式で私たちは南海トラフ地震について専門家の話を聞かされました。一年時は南海トラフ地震についての授業も必須のものだった記憶があります。私の所属していた農学部は 2 年時からキャンパスが海沿いになり、避難訓練にも多くの学生が積極的に参加していました。避難場所は屋上。初めて屋上に上がった時その高度の低さに初めて恐怖を覚えました。この経験から東日本大震災にも心を向け始め、次第に被災地を訪れたいと思うようになりました。私にとって今回の授業はよい機会だと感じ、このグループへの参加を決めた次第です。

初めて飯舘村を訪れたときは山積みフレコンバッグ、土嚢に使われ削り取られた山、イノシシに荒らされた農地を実際に多く見かけ、山に囲まれて育ってきた私はとても悲しい気持ちになりました。しかしながら、太久保さんに会って、太久保さんの夢と希望と花への愛に感銘を受けました。私は 2016 年、華道の家元をしていた花好きの祖母を亡くしました。太久保さん

も昨年お母さまを亡くされておりながら、それでもその孤独と立ち向かい、花と向き合い、前へ進んでいます。その姿を見て、共感をし、そして勇気をいただきました。大久保さんの役に立ちたいと素直に思ったことを覚えています。

実際に授業での活動が終わってみると、大久保さんの役に立てたことは今のところほとんどなく、まだやり残したことがたくさんあります。時間的制約・資金の問題などありますが、現地に行くことができなくてもお役に立てることがあり、今できることがあると私たちは知りました。3月のイベントまではせめて活動を続け、少しでもお役に立てたといえるようになっていたいと思います。そしてその後も私なりの形でマキバノハナゾノ計画に関わっていけたらと思っています。

課題

活動内容は引継ぎのものであり、先輩方も並行して動いておられたので、私たちの活動の仕方については考えなければならず、動き出しが遅れてしまったように思う。好きなように活動すればよいと言ってはいただいていたが、同じことをなぞったような活動で大久保さんを混乱させることはしたくなかったため、答えを出すのに時間がかかってしまった。

先輩のミーティングにも参加できるメンバーはなるべく参加するようにはしていたが、なかなか予定が合わず、同じ目標に向かっていながら先輩メンバーと私たちの代で情報共有や共通認識を持つことができていなかったことが今回の課題だと思う。時間をとって全員で会うことが難しいのであれば、早い段階でこちらから SNS やメールなどを通じて情報開示をするなど、工夫が必要であった。

森口美歩 国際情報農学研究室

溝口勝先生を始め、ふくしま再生の会の皆さまや「いいはな」の皆さま、M1 のメンバーと共に飯舘村を訪問させていただけたことに非常に感謝しております。東日本大震災が起きた当初は福島にいましたが、自分には何もできず、ただ自分の無力さを感じるしかありませんでした。自分には何ができるのか、人生を通して何をしたいのか模索するしかない日々でした。今回、農学国際特論Ⅰの授業を通して、福島県飯舘村を訪問する機会をいただき、復興について新たな気づきを得られたと感じます。

現地では飯舘村の復興に向けて活動される方々とお会いすることができました。誰も、突きつけられた現実を悲観することはありませんでした。その土地への愛と絶対に諦めないという強い意志を持ち、ひたすら前進されていました。また、それぞれの人生にしたがって、それぞれの復興のあり方を持っていました。少しの時間ではありましたが、そういった方々と共にさせていただく中で、自分自身でしか成し得ない復興を見つけ取り組むことが重要だと感じました。私は私なりの復興を始めれば良いと考えるに至りました。

今回の活動を通して、多方面から様々なことを考えるきっかけをいただきました。毎回のミーティングで意見を交わし取り組んだ時間は、上手くいかないことも多々ありましたが、今振り返るならば、無駄なことはなく、有意義な時であったと思います。個人的には至らないことが多くありましたが、参加させていただけたことをありがたく思います。今後、また様々なことに会おうと思いますが、今回の活動、出会いを自分のものとして活かしていけたらと思います。

8. 連絡先

■ いいはな

Email : iitate2016@gmail.com

Facebook : 「いいはな」 (ID : @iihana2016)

HP : <http://iitate2016noukoku.weebly.com/>

■ 溝口先生

東京大学大学院農学生命科学研究科 溝口研究室

〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

amizo[at]mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

TEL:03-5841-1606

■ ふくしま再生の会

HP : <http://www.fukushima-saisei.jp/>

9. 謝辞

本稿を作成するにあたり、多くの方々にご協力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

まず私たちの活動の対象地の持ち主である大久保金一さんには、活動場所の提供、インタビューをはじめとして全面的に協力していただきました。私たちの提案へのたくさんのご意見のおかげで、活動がより良いものとなっているのを実感しております。今後もお体に気を付けていただきつつ、素敵な花園を作り上げていってください。たくさんの方が訪れる思い出の場所となるよう、ともに力を合わせていきましょう。

田尾陽一さん、菅野宗夫さんをはじめとするふくしま再生の会の皆様には、現地での活動を様々な形でサポートしていただきました。お忙しい中であるにもかかわらず、お弁当を作ってください、村内を案内していただき、過去の飯舘村、事故による変化、現在の取り組みなど多くのことを解説していただきました。今後も、飯舘村や大久保さんの情報を発信していくうえでお力添えをいただきたく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

東京大学大学院農学生命科学研究科教授およびふくしま再生の会副理事長の溝口勝先生には、農学国際特論Ⅰの監督をしていただいたことに加え、現地での移動、ふくしま再生の会との連携など、大変お世話になりました。

前年度の農学国際特論Ⅰ飯舘グループの先輩方には、情報の引継ぎだけでなく、活動の相談、提案へのフィードバックなど、密接にかかわっていただきました。オンオフをはっきりさせ、楽しみながらも真剣に課題に向き合うその姿勢は、グループワークをうまく進めていくうえでとても重要なことなのだと学びました。

東京大学ソーシャル ICT グローバルクリエイティブリーダー育成プログラム事務局（GCL 事務局）様には大きな金銭的助力をいただきました。GCL 事務局様なしにはこの活動は遂行できませんでした。謹んでお礼申し上げます。

